

特集 「Q-U」

「Q-Uを用いた学級集団の分析と対応」

原 一宏

一 はじめに

学校現場は教育問題の渦の中に混迷をきたしている。教員評価制度、教員免許更新制、新学習指導要領の実施、保護者対応、発達障害を抱えた子ども達への対応、いじめ、不登校、プライバシー保護、説明責任……。あげればきりがなし。現場の先生方は授業以外に教育会、同好会の事務的な仕事を抱えている先生方もいる。さらに拍車をかけ、子ども達の安全管理、学校危機管理が強化され、忙しい先生方に追い打ちをかけているのが現状である。

「明日の授業」をどうするか、「目の前にいる子ども達をどうするか」このことをじっくりと考える時間の確保が難しくなっている。本校ではできるだけ教材研究・学級事務の時間を勤

務時間内に確保することにとめていけることはありがたいことである。

「教師は授業で勝負する」とかつてから言われてきた。しかし、前に述べたように現状はかなり厳しいものがある。日本の教育は「学級集団」を母体として進められてきた。今後もどんな教育改革があろうと変わらないと思われる。

しかし：学級集団が集団として機能するためには子ども達の今の実態からかなり苦労や工夫をしていかないと集団は育っていかないのが現状である。低学年の学習習慣形成の先生方の配置もこれを物語っている。とある校長先生の中に「今の先生方はだらしがない。私が担任したときは一クラス六十名もいて、きちんとしてきた」といわれた先生がいたそうである。（河村先生 談 現早稲田大学教授）しかし、これは全く現状を認識していない。今の先生方は大変優秀な先生方が多いように思う。少なくとも私の周りにいる先生方はそうである。

社会のめまぐるしい変化、社会環境、家庭環境の変化によって、子ども達は変わってきているのである。私たちは現状をしっかり認識しなければならぬ。小学校一年生四月は先生の話をお聞かせするのが困難である。

私が初めて持たせていただいた十五年前の一年生は少なくとも

も先生が話し出すと静かになった。今は違う。

従って、担任は学級集団を集団として機能させていくために以前よりもかなり手を入れていく必要が出てきたのである。

どんなに優れた教材を用意しても高まった学級集団になっていなければ「授業」の成果も半減してしまうし、学力も定着しにくいことは明らかであろう。(あくまでもコンピュータであるので細かな分析は人の手がどうしても必要になってくる)

そのために、「Q-U」は一つの有効な心理検査であると思う。言うまでもなく、「Q-U」は学級集団をみるための方法であり、観察法、調査法、面接法なども取り入れ、いろいろな面から学級集団をとらえていく必要があるだろう。

「Q-U」(Questionnaire-Utilities)については駒ヶ根市の小中学校をはじめとして、各学校で実践されているところが多くなってきているので今更説明する必要もないであろうが、河村茂雄先生(現早稲田大学教授)がおよそ、十年前に開発された実用的な学級集団をみるための心理検査のことである。開発に手がけてきた河村教授は次のように述べている。「開発当時、いじめ被害を受けた中学生が、自分のいじめられた辛さを綿々と大学ノートに綴って自殺する事件が全国的に続き、社会の批判が学校、教師に向けられた。曰く『そばにいて、教師なのに、子どもたちの心に気がつかなかったのか』である。

十年経った現在、佐世保の少女殺害事件の影響で、Q-Uへの問い合わせが全国の教育委員会から再び殺到している。NHKなどのテレビの取材も相次いでいる。

わからなくなったという現代の子どもたちの内面を、教師はどう理解し、どのように対応すればいいのかという危機感と、わからなかったでは教育の専門家として許されない、という批判への対策があるのである。その有効な対策方法がQ-Uだからである。」(都留文科大学 河村研究室ホームページより抜粋)

十五分位で簡単にできるので先生方にも好評のようだ。ただし、用紙代が百円かかり、コンピュータ診断していただく二百円余計にかかる。Hyper-Q-U(ハイパー・キューユー)は、二〇〇七年に新刊になったQ-Uのグレードアップ版である。従来の二つの心理検査(「いごこちのよいクラスにするためのアンケート」「やる気のあるクラスを作るためのアンケート」)に加え、新作の「日常の行動をふり返るアンケート」が加わり3つの尺度から構成されている。「日常の行動をふり返るアンケート」はソーシャルスキル尺度(「配慮」のスキル・「かわり」のスキル)を用いて、対人関係力を測ることにより、児童生徒および学級集団の状態をより多面的にとらえることが可能になった。

用紙代百八十円、診断料二百四十円、あわせて四百二十円と割高であるが、対応策までコンピュータで診断されてくるので非常に便利だと思う。

いじめ問題にマスコミに追求されるのが、学校職員は「そういう事実はなかった」ということであり、「知らなかった」と言うことが多い。もはや「知らなかった」ということは通用しない。QIUもそういう背景から生まれたものであり、「落ちていたクラス」「しつとりしているクラス」「騒がしいクラス」「あまり反応しないクラス」等と漠然と担任の口から出ていたものを数値化して標準化したものなのである。(裁判を起こされた時も有効な資料となりうる)

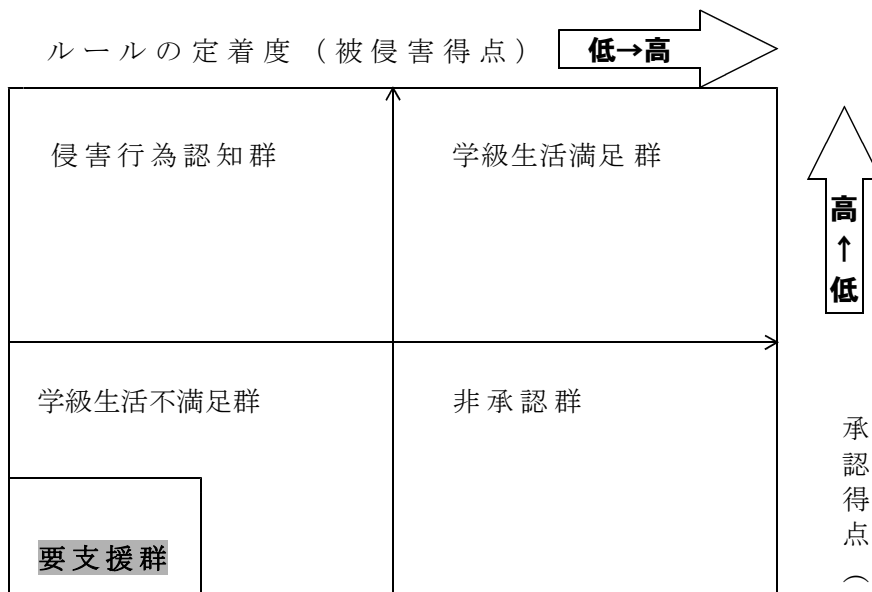
こういうものがあると、データという共通の基盤を使って、どうサポートできるか学年会でも簡単に検討できる。担任自身のパーソナリティを問題にするのではなく、目の前にいる児童生徒とどうしたらよりマッチングできるかと言うことが問題にされるようになる。

QIUの目標

○児童生徒個人の個人内評価を把握・いじめ被害 ・学校不適応傾向の把握・無気力傾向とその要因○学級集団の状態を把握・学級崩壊の可能性の把握○学級集団と児童生徒個人との関係を把握する・学級集団を構成している児童生徒群の把握○定

期的に実施することによって変容を把握する(五月中旬～六月上旬/九月末～十月/二月末 等)

QIUのプロット図(分析表)



承認得点(リレーシヨンの確立)

※大事なことはその子が自分のクラスで満足しているかと言うことであり、その子がどう感じているかと言うことだ。担任の思いではないのである。

目指すところは満足群に入る子を出るだけ多くすることであるが、全国平均としては六十パーセントから七十パーセントである。(昨年の六年生はちなみに九〇パーセントであった)しかし、満足群に大勢入っていたとしても、いじめは起こらな

いということはない。いじめが起こった時に、解決能力は早期であるし、解消度も高いのである。

別ページ（図1）にこのプロット図が学級崩壊へと移行していく図を示してある。参考にされたい。

二 活用方法

「Q-U」のプロット図をどう活用するか

活用するにはいろいろな方法があるが、K13法と言う方法があるので述べてみたい。

〈K・13法の基本姿勢〉

- ① 教師のパーソナリティー（personality・個性／人柄）に原因を求めない。
- ② 原因を教師の「指導」と「児童生徒」とのマッチング（matching・つり合い）に求める。
- ③ 教師のチームワークが大切。：同僚性の発揮
- ④ 普通に出ることをやりきる
- ⑤ 教師の力量を互いにつけ合う。

○事例検討（資料2を配布）

〈K・13法の手順〉：やっていく項目が13あることから

○担任の学級経営上の悩み事を発表してもらおう。（悩みを意識化することが大事）

（担任説明：資料2をもとに）

（1）事例提供者（担任等）は学級集団の事例の一部分（インシデント）を発表する。

□参加者はプロット図（分析表）にマーク

①学級のリーダーを説明

②子ども達の主なグループを説明する。（公的・私的リーダー、グループの特徴）

③配慮を要する子どもを説明する（同時に予想外の子がいたら説明する）

④学級の問題と思われる内容を説明する

（2）参加者は事例提供者に質問して、事例に関する情報を得る。問題の全体像を理解する。

⑤参加者は、事例提供者に疑問点・確認したい点を質問する。

司会者が促して説明してもらう内容（・学級経営の方針・日々の授業野進め方・四群ごとの児童生徒の特徴と関わり）

（3）アセスメント（面接や心理検査を通してクライエントをさまざまな視点から捉えることでそのクライエントと、クライエントが抱えている問題との関係とを理解しようとするものである。）

⑥参加者（事例提供者も含めて）が考えられる問題のアセスメントを出来るだけ多く発表する。（カードや紙に書いても良い）途中で反論しない。

⑦全員で似た内容の物同士を集めて整理する。（タイトルをつけても良い）

⑧重要だと思ふ順番に並べて、そう考えた理由を発表する。全員で協議して統一した見解を作る。（「私はくだから、くだと思ふ」のアイメッセージで発表）

（４）対応策の検討

⑨⑧の解決法を出来るだけ多く発表する。（抽象論ではなく、具体的な行動レベルで）

⑩⑦と同じように整理する。

⑪⑧と同じように順序をつけ、統一の対応策を作る。目的を明確にして、２週間後、一ヶ月後：というようにサブゴールも明確にしておくが良い。

⑫事例提供者の不安な点、懸念される点について、対処策を確認する。

（５）結論と決意の表明

⑬事例提供者が取り組む問題と、具体的な対策を発表する

□全員の拍手で終了。：担任（事例提供者）が「よーしやるぞ」という気持ちになってくれると良い。

具体的な対応については紙面の関係で述べることは出来ないが、「学級集団はルールとリレーション（相手を尊重して、親和的な人間関係／あたたかくて受容的で自由な人間関係）から成り立っている」（河村）とすれば、学級で求められるのは「ルールの定着」と「リレーション」である。特に「リレーション」を高めていくためには、「ルールを守る」ということ根底にあるはずである。リレーションを高めていくにはいろいろな方法が考えられると思うが、いくつかを述べてみたい。（発達段階によって変わってくると思う）

○基本は教師と児童生徒の関係から児童生徒同士の関係へ

○朝あつたらみんなと挨拶をする（握手で）

○クラスのみんなで遊ぶ時間を設定する

○一人の問題をクラスの問題ととらえ、共に悲しみ、共に喜ぶ経験を沢山積み重ねる。

○SGE（構成的グループエンカウンター）を朝の会、帰りの会に定期的に取り入れる。（資料3）

○対人関係ゲーム（くまがり等）

○フォークダンス ○友だちへの声かけ ○学校行事を

生かす（・行事での児童生徒の取り組みの姿を広げる・
目的を持たせる）：（略）

※SGEと対人関係ゲームは背景理論が異なるのでここ
では別にしてある。

おわりに

河村茂雄先生（早稲田大学教授）の言葉を引用して終わりに
したい。

「自分の教育実践を勘や経験則のみに頼っている教師は、問
題が生じた場合、自分や児童生徒を必要以上に責めてしまう。
とくに、自分は力の無い教師なのではないかと、自分を否定的
に考えてしまう。」

調査法の活用は、教師に自分の教育実践を分析的に見るとい
う態度を形成する。したがって、問題が生じた場合でも、修正
すべきポイントに対応すればよいと考え、自分を否定するよう
な極端な思考には陥らない。問題を客観的にとらえて、建設的
（二〇〇四年七月財団法人応用教育研究所発行 応研レポート

NO. 70）

現場の先生方、特に担任をもたれている先生は日々悩んで
いるはずである。

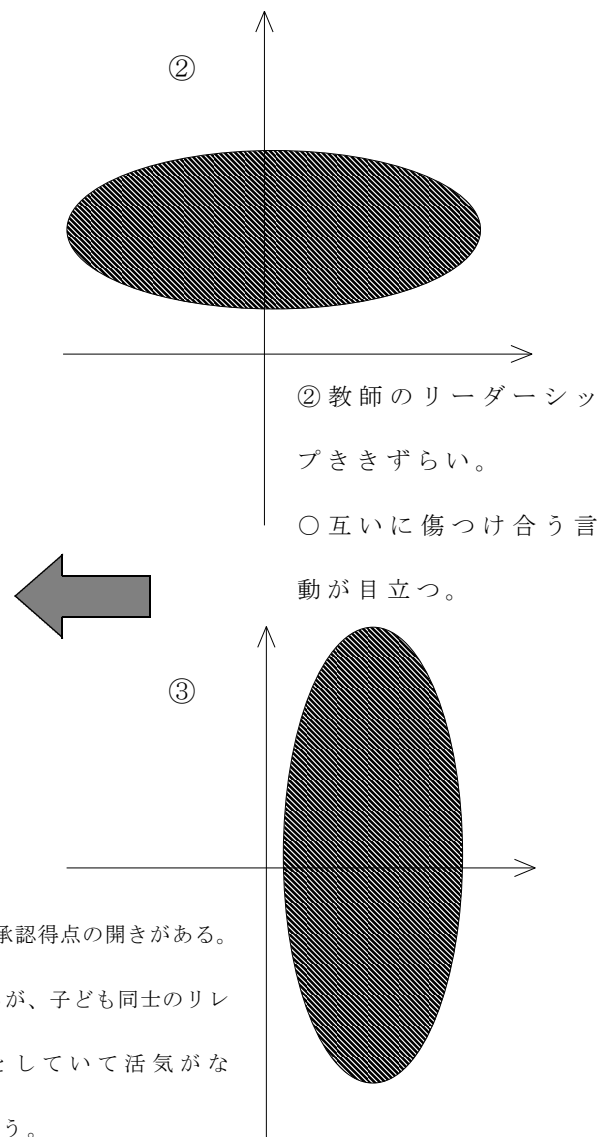
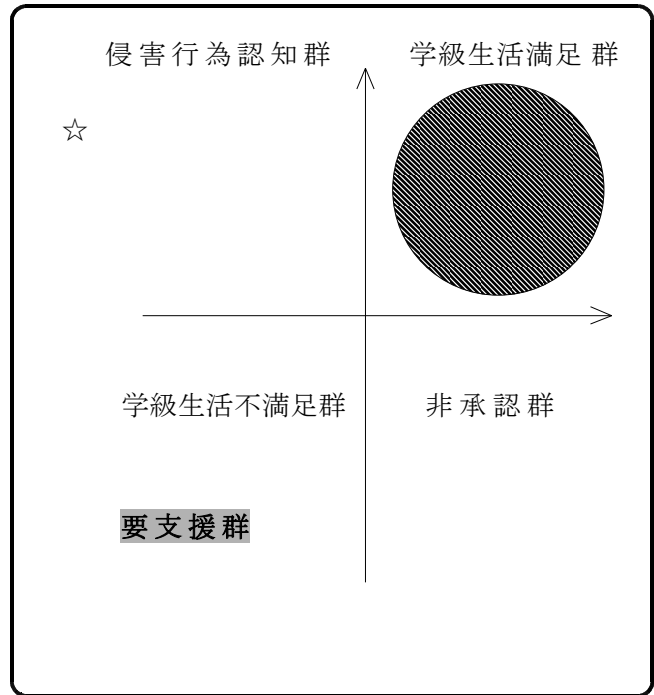
共に悩みを分かち合い、子ども達のために何が出来るか一
緒に模索できたらと思う。

子ども達が元気でいるためには、担任の先生達が元気で、
教職員が元気でないと…。そのためには自分はどう
に対応できるのである。つまり、教師が自分の心の健康を保つ
方法としても、調査法の活用は有効なのである。」

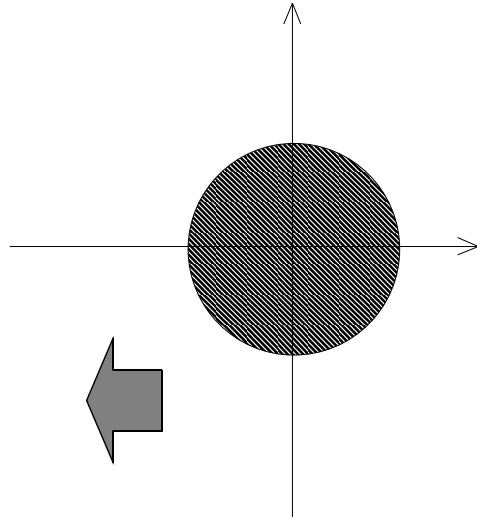
事例提供者（担任教師など）の報告

◇ 学級集団の背景 : 学校 学年 人数 名 (男子 名、女子 名) ・ 学校の特徴・・・ ・ 学級編成の状況 (持ち上がり等)・・・
◇ 問題と感じていること
◇ 学級の公的なリーダーの児童・生徒 (番号と簡単な説明)
◇ 学級で影響力の大きい/影で仕切るような児童・生徒 (番号と簡単な説明)
◇ 態度や行動が気になる児童・生徒 (番号と簡単な説明)
◇ プロットの位置が教師の日常観察からは疑問に感じる児童・生徒 (番号と簡単な説明)
◇ 学級内の小グループを形成する児童・生徒 (番号と簡単な説明)
◇ 4群にプロットされた児童・生徒に共通する特徴 ・ 満足群・・・ ・ 非承認群・・・ ・ 侵害行為認知群・・・ ・ 不満足群・・・
◇ 担任教師の方針 ・ 学級経営・・・ ・ 授業の展開・・・

①初期状態。あるいは子ども達がそれぞれの思いで集まっている。子ども同士の関わりが希薄。
(放任型か管理型か)



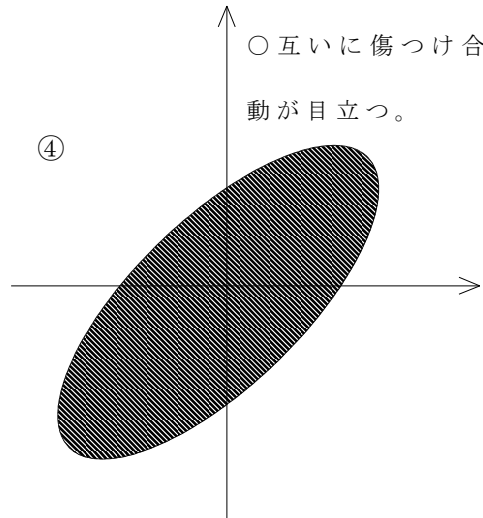
①



☆子ども達は主体的に生き生きと活動している。子ども達だけである程度活動できる。子ども達同士の関わり合いがあり、発言・笑いが多く見られる。

④教師のリーダーシップ
 プキかない。

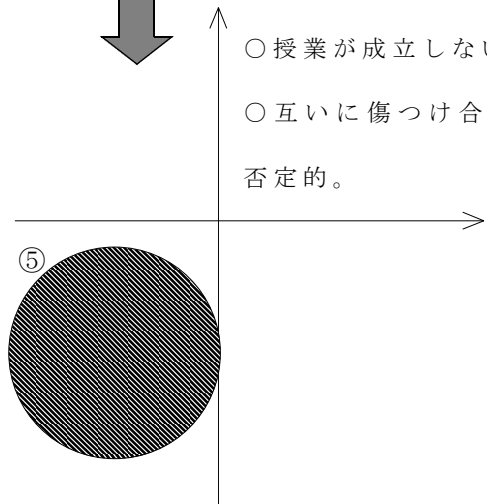
④



○互いに傷つけ合う言
 動が目立つ。

⑤学級崩壊

⑤



○授業が成立しない
 ○互いに傷つけ合い、
 否定的。

【S G E）小学校 1年 例 それゆけ レスキュー隊 （40分）特活（7月）

①（インストラクション）「それいけレスキュー隊」というゲームをします。皆さんはレスキュー隊って知っているかな？ 火事や事故が起こった時に人の命を助ける人のことです。赤帽子の人は患者さん、白帽子の人はレスキュー隊員です。1・2・3班は最初にレスキュー隊をやりましょう。レスキュー隊のいるところが安全なので、安全地帯としておきます。患者さんがいるところは4・5・6班は患者ですよ。病院と安全地帯に分かれてもらいますね。（5分）

②（エクササイズ）レスキュー隊の皆さんは、患者さん達を安全に運ぶためにはどういふ風に運んだらよいか相談しましょう。患者さん達は全身が動けないとか、片方の足が動かないとか、いろいろな病気やけが人を相談して考えてみましょうね。時間は2分間です。よーい。はじめ。（「どうやって運ぼうか？」）

「ハイやめて。じゃあいきますよ。「火事だあ」 ・子ども達は喜んで、スタート。患



者さんにどこが痛いかきいている子、台を慎重に上り下りする子。見ていて頼もしい。

③（シェアリング）ハイ。集まりましょう。感じたこと、気づいたことを発表しましょう。

・〇〇さんが大事に僕を持ってってくれて嬉しかった。

・いつまで待っても運んでくれなくて、でも、最

後に大勢のレスキュー隊が来て運んでもらった時は嬉しかった。

④役割を交代してやりましょう。（役割を交代②～③をする）



